

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24242014

研究課題名(和文) 消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A basic descriptive study of the grammars of endangered Ryukyuan and Hachijo languages

研究代表者

狩俣 繁久 (Karimata, Shigehisa)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：50224712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 38,900,000円

研究成果の概要(和文)：消滅の危機に瀕した琉球諸語の奄美語の七つの下位方言、沖縄語の十の下位方言、宮古語の四つの下位方言、八重山語の五つの下位方言、与那国語の計27の下位方言、および八丈語を加えた計28の方言についての文法記述を行った。記述に際しては、統一的な目次を作成して行った。琉球諸語についての知識のない研究者にも利用可能なものを目指して、グロスを付した記述を行った。最終年度までに研究成果として『琉球諸語 記述文法』、 の3冊を刊行した。

研究成果の概要(英文)：The present study dealt with the grammatical description of endangered Ryukyuan languages and the Hachijo language. 28 languages, i.e. 27 Ryukyuan languages (seven Amami dialects, ten Okinawan dialects, four Miyako dialects, five Yaeyama dialects and Yonaguni) together with Hachijo, were covered in this study. A shared format was devised for the descriptions of individual languages. Also, a shared set of glossing rules was used to make the descriptions readable to linguists who are unfamiliar with Ryukyuan.

研究分野：言語学

キーワード：琉球諸語 八丈語 記述文法 消滅危機言語

### 1. 研究開始当初の背景

琉球諸語は、2009年2月にユネスコによって世界の消滅危機言語として認められた。琉球諸語研究者はユネスコの発表以前から琉球諸語の危機的な状況に警鐘を鳴らしてきたが、ユネスコの発表によって、琉球諸語の危機的な状況は、一般にも広く認知されるようになり、それ以前に比べれば、琉球諸語の継承活動に対する理解は進んでいる。しかし、琉球諸語の危機的な状況は、琉球諸語話者の高齢化と過疎による人口の減少、島外からの移住者の増加、圧倒的な日本語の影響等によって、その深刻さを増している。

琉球諸語を全体として継承・再活性化させるためにも The Boasian tradition と呼ばれる辞書と文法書とテキストの3点セットの整備は急務である。琉球諸語のばあい、辞書とテキストに関してはある程度の成果を残している。1万5千語以上の単語を記録した琉球諸語の辞典が10以上の地域の下位方言で既に刊行されていたし、民話を方言のまま記録した民話集や千首近くの諺を収録した諺集が主要な下位方言で刊行されていた。しかし、包括的で体系的な記述文法は存在していなかった。琉球諸語の継承のための一般向けの文法書の作成のためには、音韻論等の他分野の研究に比較して、遅れた状況にあった文法研究を推進する必要があった。

### 2. 研究の目的

4年間の研究目的は次の(1)~(6)である。

(1) 奄美から与那国にいたる琉球諸語の18(奄美2地点、沖縄6地点、宮古6地点、八重山3地点、与那国島1地点)の下位方言と八丈語1地点の文法の記述を行う。

(2) 各下位方言の動詞、形容詞、繋詞の活用、助詞を後接させた名詞の曲用、擬声擬態語を含む副詞等の主要な品詞、感動詞、接続詞、助動詞などの付属的な品詞の形態論的な記述を行う。

(3) テンス・アスペクト・ムード、受動・使役・授受などの広義のヴォイス、推量表現、必然表現などのモダリティの記述を行う。

(4) 連体修飾節・条件節・時間状況節・節連鎖・言いさしなどの複文、平叙・疑問・命令、否定、指定・措定文や場所・所有など広義のコピュラ文などの構文の記述を行う。

(5) 各下位方言の形態論と構文論について記述しながら、記述すべき項目(目次)を検討し記述文法のモデル構築を目指す。

(6) 共同研究者が研究成果を発表する公開ワークショップを開催し、相互の研究交流の促進と学会および一般へ還元する。

### 3. 研究の方法

(1) 共同研究者(研究代表者、研究分担者、研究協力者)が対象地点を分担し、フィールドワークによって得られた言語資料を基に記述的な研究を行う。

(2) フィールドワークでは、面接調査によ

る資料収集と録音・録画による自然談話資料の収集とを行う。面接調査と自然談話の観察、録音・録画は、本研究の重要な柱である。

(3) 面接調査は、調査票を作成して予め用意した日本語の語形や例文を翻訳してもらう方法と、談話資料から抜き出した語形や例文の文法的な意味を確認する方法とを併用する。

(4) 話者の日本語との接触が長期にわたり、話者が日本語と琉球諸語のバイリンガルでもあること、日本語と琉球諸語の文法形式が類似していることなどを反映して、日本語を方言に翻訳してもらう方法では、提示された日本語を単純に直訳することがある。

(5) 談話資料からは自然で有用なデータが得られるが、特定の場面に限って現れる形式があり、得られる語形に偏りがある。

(6) 調査票による翻訳方式の調査と自然談話資料を併用することとした。

(7) 各地の下位方言の文法記述に際して、統一した目次、章立てを確立し、それに沿って記述した。この方法を採用することで、言語差の大きい琉球諸語の下位方言間の比較、参照が可能になった。

(8) 琉球諸語研究および日本語方言研究で従来はあまり採用されていなかったグロス付けを行って文法記述を行うこととした。グロス付けについては、ワークショップを複数回開催して意見交換を行い、琉球諸語を記述する上で必要な統一したグロスを採用する。

### 4. 研究成果

(1) 計当初画では、奄美から与那国にいたる琉球諸語の18の下位方言と八丈語の文法記述を目指したが、最終的には奄美語の竜郷町浦方言、大和村名音方言、宇検村湯湾方言、喜界町上嘉鉄方言、喜界町小野津方言、和泊町国頭方言、知名町正名方言の七つの下位方言、沖縄語の今帰仁村謝名方言、名護市幸喜方言、恩納村名嘉真方言、宜野湾市大山方言、うるま市津堅方言、うるま市平安座方言、南城市久高島方言、久米島町硫黄島方言、久米島町真謝方言、那覇市首里方言の10の下位方言、宮古語の宮古島市城辺保良方言、伊良部町佐和田方言、宮古島市池間方言、多良間村多良間島方言の四つの下位方言、八重山語の石垣市石垣方言、石垣市白保方言、石垣市宮良方言、竹富町黒島方言、竹富町波照間方言の五つの下位方言、与那国語祖納方言、および、八丈語の計28地点の文法記述を行った。

(2) 硫黄島は1631年、1829年、1903年に噴火があり、1959年以降無人島である。硫黄島方言は琉球諸語の中で最も危機度の高い方言であるが、その文法記述を行ったことは大きな成果の一つである。

(3) 琉球諸語の下位方言は言語差が大きく、特に形態論的な形式の違いが大きいため、北琉球諸語を研究対象にする研究者は南琉球諸語についての知見に乏しく、逆に、南琉球諸語を研究対象にする研究者は北琉球諸語についての知見に乏しい状況があったが、統一し

たグロス付けを行ったことで下位方言の比較研究と研究成果の相互参照が可能になった。

(4) グロス付けは、本土の日本語方言研究者、海外の日本語研究者・日本語方言研究者の琉球諸語研究への道を開くとともに、日本語諸方言との比較研究の可能性を広げた。

(5) 名詞の格形式において格助辞の付かないハダカ格の形式の表す文法的な意味の多義性を確認し、多義的な意味の理解が重要であると判断して、ハダカ格の多義的な意味によって AGE (agentive)、GEN (genitive)、ACC (accusative) とグロス付けすることとした。主格と属格を表す格助辞 nu と格助辞 ga の多義性についても同様に判断し AGE (agentive)、GEN (genitive) とすることにした。なお、主語になるハダカ格の名詞は文全体が未知の出来事を表す文に現れ、主語になる ga 格の名詞に指定のとりにての意味がある事も確認した。琉球諸語の格研究の活性化が促進された。

(6) 琉球諸語のアスペクト体系のうち、継続相を表す形式は、シテ対応形式に存在動詞ヲル(居る)相当形式が文法化して融合した形式が北琉球諸語に見られるが、その他にアルク(歩く)相当形式が文法化した形式が北琉球諸語の沖永良部島方言、沖縄島北部名護市幸喜方言、今帰仁村謝名方言、久米島市謝名堂方言に見られることを確認した。

(7) 琉球諸語のうち、那覇市首里方言、今帰仁村謝名方言、与論島方言にはシテ対応形に無情物存在動詞アル(有る)相当形式が融合した間接的エヴィデンシャルティーを表す形式のある事が知られていたが、久高島方言、伊平屋島方言に当該形式が存在しないことを確認した。南琉球諸語のうち、宮古島市城辺保良方言、野原方言にはシアリ形式にオク(置く)相当形式が融合した形式が間接的エヴィデンシャルティーを表し、石垣市石垣方言ではシアリ形式にアル相当形式が融合した形式が間接的エヴィデンシャルティーを表すことを確認した。

(8) 北琉球諸語の沖縄語諸方言において直接的エヴィデンシャルティーを表す形式があることを確認したが、南琉球諸語には直接エヴィデンシャルティーを表す形式がなく、アスペクト・テンス形式が北琉球諸語と南琉球諸語とで大きく異なることを確認した。

(9) 琉球諸語のアスペクト・テンスが形式の面でもその文法的な意味の面でも変異に富んでいること、直接的エヴィデンシャルティーを表す形式、間接的エヴィデンシャルティーを表す形式が存在するなど、類型論的にも興味深い事例が多いことを確認した。

(10) 研究成果報告書として狩俣繁久編 2015『琉球諸語 記述文法』、同編 2016『琉球諸語 記述文法』、同編 2016『琉球諸語 記述文法』の3冊を刊行し、研究代表者・研究分担者の10人の研究論文の他に、中川奈津子、タイラー・ラウ、新永悠人、横山(徳永)晶子、ハイスファンデルルベ、松本泰文、田畑千秋、重野裕美、白田理人、仲間恵子、

山田昌寛、島袋幸子、當山奈那、麻生玲子、原田走一郎、クリストファー デビスの16人の研究協力者の研究論文を掲載した。これら研究協力者は、『琉球諸語 記述文法』

以外にも多数の研究論文を研究成果の一部として発表している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計42件)

1. 狩俣繁久「硫黄島島方言の動詞の活用」『琉球諸語記述文法』、査読無、2016、pp.15-32
2. 荻野千砂子「八重山黒島方言のテンス・アスペクト」『琉球諸語記述文法』、査読無、2016、pp.94-104
3. 西岡敏「沖縄語首里方言のモダリティ表現 - 動詞接続によるものを中心に -」『琉球諸語記述文法』、査読無、2016、pp.119-133
4. 下地賀代子「宮古語多良間島方言の形容詞形態論」『琉球諸語記述文法』、査読無、2016、pp.134-155
5. 中川奈津子、タイラーラウ、田窪行則「八重山語白保方言の文法概説」『琉球諸語記述文法』、査読無、2016、pp.1-60
6. 下地理則「南琉球宮古伊良部長浜方言の方向格=*nkai* と与格=*n*」『琉球諸語記述文法』、査読無、2016、pp.61-86
7. 松本泰文「奄美大島北部方言(竜郷町瀬留)の名詞形態論まえおき」『琉球諸語記述文法』、査読無、2016、pp.119-130
8. 又吉里美「沖縄語津堅方言の文法記述 - 名詞の格 -」『琉球諸語記述文法』、査読無、2016、pp.131-151
9. 仲原穰「久米島真謝方言の簡易文法 - 名詞の格 -」『琉球諸語 記述文法』、査読無、2016、pp.152-164。
10. 原田走一郎、荻野千砂子「沖縄県黒島方言の音節一覧・助詞・談話資料」『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した調査研究』査読無、2016、pp.145-183。
11. 狩俣繁久「石垣島四箇方言の間接的エヴィデンシャルティー」『琉球の方言』40号、査読有、pp.94-104、2016。
12. 又吉里美「沖縄県うるま市津堅方言の条件表現について - *-riiba* 形と *-ine* 形の形態論的記述と条件表現に関する言語資料 -」『岡山大学国語研究』30巻、査読無、2016、pp.60-75。
13. 狩俣繁久「琉球諸語のアスペクト・テンス体系の形式」『琉球諸語と古代日本語 - 日琉祖語の再建にむけて』、査読無、2016、pp.94-104。
14. 下地理則「南琉球与那国語の格配列について」『琉球諸語と古代日本語 - 日琉祖語の再建にむけて』、査読無、2016、

- pp.173-207.
15. 狩俣繁久「沖縄名護市幸喜方言の終助詞とモダリティ」『琉球アジア文化論集』第2号、査読無、2016、pp. 33~104.
  16. 中川奈津子、タイラーラウ、田窪行則「琉球八重山語白保方言の音韻」『琉球諸語記述文法』、査読無、2015、pp.1-21
  17. 原田走一郎・荻野千砂子「黒島方言の文法スケッチ - アクセント・動詞・形容詞の小考察 - 」『琉球諸語 記述文法』、査読無、2015、pp.75-99
  18. 下地賀代子「南琉球・多良間島方言の動詞形態論」『琉球諸語 記述文法』、査読無、2015、pp.137-159.
  19. 狩俣繁久「硫黄島方言の簡易文法記述 - 名詞の格 - 」『琉球諸語 記述文法』、査読無、2015、pp.183-199 .
  20. 木部暢子「鹿児島方言辞典 - 遊戯の部 - 」『国語国文学薩摩路』59号、査読無、2015、pp.1-7 .
  21. 狩俣繁久「語構成からみた沖縄県名護市幸喜方言の形容詞」『琉球の方言』第39号、査読有、2015、pp.87-116 .
  22. 又吉里美「津堅方言の動詞の記述 - 動詞の形態とテンス・アスペクト - 」『琉球の方言』第39号、査読有、2015、pp.117-164 .
  23. Shigehisa Karimata "Ryukyuan Languages: A grammar overview"『Handbook of Ryukyuan Linguistics』、査読有、2015、pp113~140
  24. 木部暢子「奄美喜界島方言の親族語彙 - お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん - 」『国語研プロジェクトレビュー』5巻2号、査読無、2014、pp.57-67
  25. 下地賀代子「南琉球・多良間島方言の格再考 - ni:格、Nka 格を中心に - 」『国立国語研究所論集』7号、査読有、2014、pp.227-249 .
  26. 木部暢子「鹿児島方言の「イツ」と「イタツ」 - テキストを使った方言研究の実践 - 」『西日本国語国文』1巻、査読有、2014、pp.1-14 .
  27. 木部暢子「言語・方言が消えていく」『學士會会報』909巻、査読無、2014、pp.43-46 .
  28. 狩俣繁久「名護市幸喜方言の可能表現の文」『日本東洋文化論集』第20号、査読無、2014、pp. 33~54.
  29. 木部暢子「「香」のことば」『人と自然』7号、査読無、2014、pp.20-23 .
  30. 狩俣繁久「危機に瀕する南奄美沖縄北部諸方言と沖縄中南部諸方言」『日本語学』32巻10号、査読無、2013、pp.24-34
  31. 金田章宏「危機言語としての八丈方言」『日本語学』32巻10号、査読無、2013、pp.48-60
  32. 狩俣繁久「与那国島方言におきた音韻変化」『琉球アジア社会文化研究』16号、査読無、2013、pp.60~81、
  33. Shigehisa Karimata "The Representative, Negative, Past, Continulative Forms of Miyako Verbs"『国際沖縄研究』第7号、査読有、2013、pp81~106
  34. 狩俣繁久「琉球宮古島野原方言の間接的エヴィデンシャルティ」『日本東洋文化論集』第19号、査読無、2013、pp.41~60、
  35. 狩俣繁久「名護市幸喜方言の擬声擬態語」『琉球の方言』37号、査読有、2013、pp.17-38
  36. 狩俣繁久「沖縄北部名護市幸喜方言の格形式」『人文社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学』2号、査読無、2013、pp.127-166
  37. 山田真寛、ペラール・トマ・下地理則「与那国語の簡易文法と自然談話資料」『人文社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の育成研究推進プロジェクト成果報告書』2号、査読無、2013、pp.205-230 .
  38. 又吉里美「大山方言の動詞」『人文社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の育成研究推進プロジェクト成果報告書』2号、査読無、2013、pp.239-242 .
  39. 狩俣繁久「琉球宮古島野原方言の動詞のアスペクト・テンス・ムード体系の概要」『琉球アジア社会文化研究』15号、査読無、2012、pp.13~37
  40. 狩俣繁久「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」『日本東洋文化論集』第18号、査読無、2012、pp.41~60
  41. 五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール・トマ、久保智之。「宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』、第16巻1号、査読有、2012、pp.134-148.
  42. 金田章宏「八丈方言における新たな変化と上代語」『言語研究』142号、査読有、2012、pp.119-142
- 〔学会発表〕(計51件)
1. 荻野千砂子「南琉球八重山地方石垣宮良方言の指示代名詞」日本語学会、2015.10.31、山口県・山口大学。
  2. 原田走一郎・荻野千砂子「黒島方言のヴォイス・アスペクト」国語研共同研究プロジェクト合同発表会「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」2015.8.21~23、東京都・国立国語研究所。
  3. 狩俣繁久「石垣方言のアスペクト・エヴィデンシャルティ」国語研共同研究プロジェクト合同発表会「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」2015.8.21~23、東京都・国立国語研究所。
  4. 又吉里美「津堅方言のテンス・アスペクト - 進行相を中心に - 」国語研共同研究プロジェクト合同発表会「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」2015.8.21~23、東京都・国立国語研究所。

5. Takubo Yukinori “ Issues in the verbal morphophonemics of Ikema ryukyuan ” Phonology Forum (招待講演) (国際学会) 2015.8.19、大阪府・大阪大学。
6. 荻野千砂子「石垣宮良方言の指示詞」筑紫日本語研究会、2015.8.10、大分県・九重共同研究所。
7. 田窪行則「宮古方言の形態音韻論 - 動詞形態論を中心に - 」関西言語学会第40回大会、2015.6.14、兵庫県・神戸大学。
8. 荻野千砂子「南琉球八重山宮良方言の謙讓語ウヨーフン - 視点移動の仕組み - 」筑紫日本語研究会、2015.5.30、福岡県・九州大学。
9. 田窪行則「危機方言、危機言語の記録、維持の方法としてのデジタル博物館作成の試み」第7回継承言語シンポジウム(招待講演)、2015.3.7~3.8。沖縄県、キリスト教学院大学。
10. 仲原讓「沖縄久米島方言の文法」沖縄言語研究センター定例研究会、2015.1.10。沖縄県、琉球大学。
11. 下地賀代子「多良間方言の記述文法」沖縄言語研究センター定例研究会、2014.12.6。沖縄県、琉球大学。
12. 狩俣繁久「沖縄県名護市幸喜方言の特性形容詞と状態形容詞」沖縄言語研究センター定例研究会、2014.11.8。沖縄県、琉球大学。
13. 金田章宏「八丈語の形容詞について」「危機方言」共同研究発表会「形容詞の記述と問題点」2014.9.13~9.14。東京都・国立国語研究所。
14. 下地理則「驚異の万能語根 - 宮古諸方言における形容詞語根の特徴 - 」「危機方言」共同研究発表会「形容詞の記述と問題点」2014.9.13~9.14。東京都・国立国語研究所。
15. 狩俣繁久「形容詞と名詞のあいだ - 琉球諸語はいかに第二形容詞を発達させているか - 」「危機方言」共同研究発表会「形容詞の記述と問題点」2014.9.13~9.14。東京都・国立国語研究所。
16. 又吉里美「津堅方言と大山方言における形容詞の形態および機能の比較」危機方言」共同研究発表会「形容詞の記述と問題点」2014.9.13~9.14。東京都・国立国語研究所。
17. 荻野千砂子「八重山石垣方言の敬語の仕組み」危機方言」共同研究発表会「形容詞の記述と問題点」2014.9.13~9.14。東京都・国立国語研究所。
18. 荻野千砂子「南琉球八重山石垣宮良方言の謙讓語 - お目にかかる・ご案内する - 」東アジア日本語教育・日本文化研究学会、2014.8.23、台湾・崑山科技大学。
19. 下地理則「伊良部島方言の与格と方向格の意味記述」沖縄言語研究センター、2014.7.5。沖縄県・琉球大学。
20. 西岡敏「琉球宮古方言の言語地理学的研究から見えてくるもの」沖縄言語研究センター、2014.7.5。沖縄県・琉球大学。
21. 又吉里美「大山方言の文法記述 - 動詞を中心に - 」沖縄言語研究センター、2014.6.14。沖縄県・琉球大学。
22. 仲原讓「久米島方言の文法記述」沖縄言語研究センター、2014.5.24。沖縄県・琉球大学。
23. 西岡敏「首里方言の文法記述」沖縄言語研究センター、2014.5.24。沖縄県・琉球大学。
24. Takubo Yukinori “ The Digital Museum Project for the Language and Cultures of Ikema Ryukyuan ” The 16th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing Kyung Hee University . 2014.5.10 . KOREA Kyung Hee University .
25. 金田章宏「八丈語の調査から - 方言調査は人との出会い - 」国立国語研究所 時空間変異研究系 合同研究発表会 2014.03.21、東京都、国立国語研究所。
26. 下地理則「伊良部方言の動詞の記述」琉球諸語ワークショップ、2014.3.13。沖縄県、沖縄県立博物館・美術館。
27. 荻野千砂子「竹富町黒島方言の実態」しまくとぅばシンポジウム「シマのことばの危機」2014年2月23日、沖縄県、沖縄県立博物館・美術館
28. 木部暢子「方言危機について - 方言の危機の背景 - 」しまくとぅばシンポジウム「シマのことばの危機」(招待講演)、2014.2.23、沖縄県、沖縄県立博物館・美術館
29. 金田章宏「八丈方言の実態」しまくとぅばシンポジウム「シマのことばの危機」(招待講演)、2014.2.23、沖縄県、沖縄県立博物館・美術館
30. 金田章宏「八丈方言の価値と継承における学校の役割」八丈町教育委員会研究指定校研究発表会、2014.2.5。(招待講演)東京都、八丈町立三原中学校。
31. 仲原讓「沖縄久米島方言の記述文法」沖縄言語研究センター定例研究会、2014.1.11、沖縄県、琉球大学。
32. 又吉里美「津堅方言の文法記述 - 動詞を中心に - 」沖縄言語研究センター定例研究会。2013.12.7。沖縄県、琉球大学。
33. 西岡敏「恩納村瀬良垣方言の助動詞」沖縄言語研究センター定例研究会。2013.12.7。沖縄県、琉球大学。
34. 狩俣繁久「記述文法にできること - 硫黄島方言を例に考える再生可能性 - 」沖縄言語研究センター定例研究会。2013.11.23。沖縄県、琉球大学。
35. 狩俣繁久「名護市幸喜方言の動詞、形容詞」沖縄言語研究センター定例研究会。2013.10.19。沖縄県、琉球大学。
36. 木部暢子「鹿児島方言の動詞、形容詞の文法記述 - グロス付けの方法を中心に

- 」消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究(国立国語研究所)共同研究会、2013.8.27.福岡県、九州大学。
37. 金田章宏「八丈方言の動詞、形容詞の文法記述 - グロス付けの方法を中心に -」消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究(国立国語研究所)共同研究会、2013.8.27.福岡県、九州大学。
38. 狩俣繁久「宮古語の動詞、形容詞の文法記述 - グロス付けの方法を中心に -」消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究(国立国語研究所)共同研究会、2013.8.27.福岡県、九州大学。
39. 荻野千砂子「南琉球黒島方言の順接の条件表現」第250回筑紫日本語研究会2013.8.8-10、大分県、九重共同研修所
40. 仲原穰「琉球語の表記法の現状 - 沖縄語の仮名文字表記の問題点」沖縄言語研究センター、2013.7.14、沖縄県、沖縄国際大学。
41. 下地(小嶋)賀代子「南琉球・多良間島方言の表記法 - 琉球諸語表記法プロジェクト事例報告 -」沖縄言語研究センター、2013.7.14、沖縄県、沖縄国際大学。
42. 荻野千砂子「二方面敬語を作る謙譲語 - 石垣宮良方言と古代語 -」日本方言研究会 第96回研究発表会 2013.5.31、大阪府、大阪樟蔭女子大学
43. 狩俣繁久「琉球諸語の子音変化の体系」沖縄言語研究センター定例研究会、2013.5.18、沖縄県、琉球大学。
44. 金田章宏「八丈方言の文法記述におけるグロスづけの試み」沖縄言語研究センター、2013.4.13、沖縄県、琉球大学。
45. 下地理則「琉球諸語研究におけるグロスの問題の概観」沖縄言語研究センター定例研究会、2013.4.13、沖縄県、琉球大学。
46. Takubo, Y. The Digital Museum project for the documentation of endangered languages: the case of Ikema Ryukyuan. Innovation: East Asian Perspectives, UCLA, January 25-26, 2013. Keynote Lecture.
47. 狩俣繁久「記述文法の可能性と不可能性」消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究(国立国語研究所)合同研究会、2013.1.22.東京都、八口一貸会議室品川。
48. 田窪行則「宮古語形態論 - 池間方言の動詞形態論を中心に -」消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究(国立国語研究所)合同研究会、2013.1.22. 東京都、八口一貸会議室品川。
49. 又吉里美「沖縄語津堅方言の記述文法 - 動詞・形容詞を中心に -」消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究(国立国語研究所)合同研究会、2013.1.22. 東京都、八口一貸会議室品川。
50. 狩俣繁久「琉球宮古島野原方言の間接的エビデンシャルティ」日本言語学会、2012.11.24、福岡県、九州大学
51. 狩俣繁久「宮古語野原方言のAspect・テンス・モダリティ」琉球諸語研究会、2012.07.14、沖縄県、琉球大学
- 〔図書〕(計5件)
1. 田窪行則、ジョン ホイットマン、平子達也編著『琉球諸語と古代日本語』2016、p.312、くろしお出版。
  2. 狩俣繁久編『琉球諸語 記述文法』、2016、p.156、琉球大学
  3. 狩俣繁久編『琉球諸語 記述文法』、2016、p.190、琉球大学
  4. 狩俣繁久編『琉球諸語 記述文法』、2015、p.245、琉球大学
  5. 田窪行則編著『琉球列島の言語と文化 - その記録と保存』、2013、くろしお出版。
6. 研究組織
- (1)研究代表者  
狩俣 繁久(Karimata Shigehisa)琉球大学・法文学部・教授、総括、沖縄南部語と沖縄北部語の調査・研究。研究者番号:50224712
- (2)研究分担者
- 1)田窪 行則(Takubo Yukinori)京都大学・文学研究科・教授、宮古語と八重山語の調査・研究。研究者番号:10154957
  - 2)金田 章宏(Kaneda Akihiro)千葉大学・国際教育センター・教授、八丈語と八重山語の調査・研究。研究者番号:70214476
  - 3)木部 暢子(Kibe Nobuko)国立国語研究所・時空間変異系・教授、日本語との比較研究、沖縄北部語の調査・研究。研究者番号:30192016
  - 4)西岡 敏(Nishioka Satoshi)沖縄国際大学・総合文化学部・教授、沖縄南部語の調査・研究。研究者番号:30389613
  - 5)小嶋 賀代子(下地 賀代子)(Kozima Kayoko)(Shimozi Kayoko)沖縄国際大学・総合文化学部・准教授、宮古語と八重山語の調査・研究。研究者番号:40586517
  - 6)仲原 穰(Nakahara Jou)琉球大学・法文学部・非常勤講師、沖縄南部語の調査・研究。研究者番号:60536689
  - 7)又吉 里美(Matayoshi Satomi)岡山大学・教育学研究科・講師、沖縄北部語と沖縄南部語の調査・研究。研究者番号:60513364
  - 8)下地 理則(Shimozi Michinori)九州大学人文科学研究院・准教授、宮古語と与那国語の調査研究。研究者番号:80570621
  - 9)荻野 千砂子(Ogino Chisako)福岡教育大学・教育学部・准教授、八重山語の調査・研究と古代日本語との比較研究。研究者番号:40331897
  - 10)元木 環(Motoki Tamaki)京都大学・学術情報メディアセンター・助教、電子情報化・デザイン。研究者番号:80362424